

# 角川総一の 金融逆さメガネ

**突** 然だが、今回のテーマは「預金」と「保険」は相容れぬものであるかどうかである。

我々は普通、ポートフォリオの中に「預金」と「保険」を持つ。そしてこれらを全く別物として意識していることが多い。しかし、果たしてそうか？「保険」と「預金」の間には共通項はないのだろうか。

と、ここまで言えば、「最近はやりの変額個人年金保険なんて、そのほとんどはごく最小限の「保険機能」が付いているだけで、もっぱら「貯蓄ならびに投資機能」

## 第38回

# 「預金」と「保険」は相容れないものなのか？

普段は別のもので意識している「預金」と「保険」。果たして両者は全く違うものなのか。沖縄の、お金にまつわるある習慣に、その答えを見つけた。

には払込金は返ってくる」という死亡保証がついているが、これはとても「保険」と呼べるべき代物ではなからう。「俺って保険という名前がついているけど、ほんとに保険なの？」と個人年金保険自身が顔を赤らめるかもしれない。閑話休題。「言葉は聞いたことがあるが、改めて尋ねられると、その実体については全くと言っていいほど知らない」ってことがままあるもんだ。今回はそんなお話である。

### いまなお盛んな 沖縄版「頼母子講」

いきなりであるが、例えば3泊4日の予定で沖縄を訪ねるとすれば、多くの場合那覇空港に降り立ち、国際通りをぶらぶらしながら買い物に励み、夜ともなれば友人と三々五々出かけてオリオンビール↓黒真珠（泡盛）に酔いしれるのが1日目。2日目、3日目はバスに揺られて国道58号線を北に万座ビーチへ。ここで民宿を根城に終日サーフィンをし、昼は沖縄そばを食し、夜はまたもやミミガー

やらナーベラーチャンプルーで一杯やり、4日目は朝一番で那覇に戻り東京へ直行。ところが、こんな旅ではまず知ることができない風習がある。その一つが「模合（もあい）」だ。なぜなら以下で紹介する模合なる風俗は、現地の沖縄人（ウチナーンチュー）と相應の付き合いをしなければ、まず触れることができないからだ。模合。本土で言う頼母子講（たのもしこう）のようなものだ。昨今、本土で頼母子講が行われているという話は寡聞にして聞かない。ところがおっとドッコイ、沖縄ではこの模合が日常茶飯に行われているのだ。

これは、住まう地域や職場、学校が同じで、日常的に顔を合わせる知人、友人が定期的に集まり、各自がいくばくのお金を拠出、これを持ち回りで決まる親（幹事？）が集め、そのまとまったお金を親が使えという仕組みだ。もともとは、本土の頼母子講と同じく、各人が拠出したお金をまとめ、そのお金はその時にお金が

入り用な人が申し出ることによって使えるという仕組みだった。

大抵は「来月俺、車検でちよっとお金がかかるんで」といった事情でお金の取り手に回ることが多いようだ。その場で誰が取り手（親）になるかを決める場合もあるが、あらかじめ次の取り手を

模合の受取額と支払額

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	...	Iさん	Jさん	受取額
1	10.0	10.0	10.0	10.0	...	10.0	10.0	100.0
2	10.5	10.0	10.0	10.0	...	10.0	10.0	100.5
3	10.5	10.5	10.0	10.0	...	10.0	10.0	101.0
4	10.5	10.5	10.5	10.0	...	10.0	10.0	101.5
...	...	...	...	...	...	...	...	...
9	10.5	10.5	10.5	10.5	...	10.0	10.0	104.0
10	10.5	10.5	10.5	10.5	...	10.5	10.0	104.5
支払額合計	104.5	104.0	103.5	103.0		100.5	100.0	

Aさんが受け取る  
Bさんが受け取る  
Cさんが受け取る  
Dさんが受け取る  
Iさんが受け取る  
Jさんが受け取る

決めておくこともあるという。ところで興味深いのは、こうしたお金の相互助け合いが個人で行われているだけでなく、法人（中小企業）によっても利用されているということだ。これを「企業模合」という。前述の個人の模合には原則として利子という概念はないが、企業模合には大抵これがつく。

### 必要な時に受け取れて 後にまわせば利息がつく

例えば、誰かが言い出しつべになって10人（10社）を集めたとして、10万円を拠出した1人（1ヵ月）に10万円の拠出、利息は1ヵ月で5000円と決めたとする。この場合、まず1回目に集まったときに、全員が10万円ずつを拠出する。そして例えば最初に親になったAさん（社）が100万円を取ると、つまり自分が拠出した10万円とほかの参加者から集まった90万円の合計。

いったんまとまったお金を受け取った人（Aさん）は、次からは毎月10万5000円ずつ支払って

いく（都合9回）。そこで2回目の会合の時には、Bさんが100万5000円を取る。そしてBさんは、3回目以降最後のまでの8回にわたって10万5000円ずつ支払っていく。次にはCさんが101万円を取る。こうして10回目の最後のJさんの取り分は、104万5000円となる。

つまり、最後の取り手であるJさんは、10回にわたって10万円ずつ拠出して、最後に104万5000円を受けとるというわけだ。利子は大体これくらいの水準だという。つまり一般の金利よりはだいぶ高い（ま、現行の水準から見ればの話ではあるが）。

ところで、途中で2人以上の人が取り手に回りたいとなることも珍しくはない。こんな場合には資本主義の原則が顔を出す。つまり、入札という名の経済原理にお出まし願うというわけだ。もちろん入札は利息について行われる。「俺は月に6000円負担する」「同じく月6500円」「同じく月5500円」、この3つが競り合えば、「月6500円」を唱え

た人がその時点で100万円プラスのお金を取ることになり、彼は以降終わりまで毎月「10万6500円」を拠出し続けることになるのだ。ともあれ「もし方がどこかでお金が入用になったら、今までの積立分は取れる権利を持っているのだから」という意味では、まあ一種の保険のようなものだ。一方、それと同時に、後のほうで現金を受け取ることになる人は預金としての機能を利用していることになる。

ここまで来れば、冒頭でご披露した「預金と保険は相容れないものなのか」という問いかけで何が言いたかったかは、お分かりいただけたらどうか。

こうした模合というイメージを背景に置けば、預金と保険は必ずしも「相容れぬ」ものではないのである。

\*今回の「模合」の内容については沖縄在住の知人、古謝好昭氏（沖縄におけるFPの先駆けとなった人）のお話に多くを負っている。どうもありがとう。